

Prologue

記憶をめぐる思考の旅へ 出かけてみませんか

石岡史子

全国の学生や教員のみなさんとともに、
ヨーロッパの史跡を訪ねる旅をはじめて、10年が経ちます。
これまで旅先で、様々なかたちの「ホロコーストの記憶」に出会ってきました。

ホロコーストとは、第二次世界大戦中、ナチ・ドイツとその占領下の
ヨーロッパで起きた虐殺です。約600万人のユダヤ人が殺されました。
さらに、約50万人のシンティとロマや、約30万人の障がい者、同性愛者、
そして他にも多くの人びとが犠牲となりました。

この歴史は、ヨーロッパの街に点在する記念碑としてかたちを残しています。
失われた命を追悼するもの。
少しずつ自由が奪われていく恐ろしさを伝えるもの。
日常の延長線上に虐殺があったと警鐘を鳴らすもの。
ナチ犯罪の責任を照らし出し、忘却に抗うもの。

それらの記念碑の多くは、道端や公園、学校の校庭、コンサートホールの前など、
人びとの暮らしの中に溶け込むようにしてたたずんでいます。

旅の途中で、その地に暮らす人びとと言葉を交わしながら
かたちにならないまま、忘却されてきた歴史にも出会いました。
性暴力の被害を受けた女性たち。

浮浪者、物乞い、売春婦——「非社会的」として排除され
名付けの言葉そのものが烙印となり
長く記憶の外に追いやられてきた人たち。

記念碑ができるまでには、長い歳月をかけた激しい議論がありました。
記憶のかたちとして見えるようになるものがある一方で
見えなくなっていくものもあることに気が付きました。

旅の中で出会う様々な記念碑は、私たちに問いかけてきます。
「異なるもの」を他者として排除してきた歴史は、
日本にも存在してきたのではないか。
ホロコーストと同じ時期に、日本がアジアに侵略した歴史を、
私たちはどのように記憶のかたちとして残すことができるだろうか。
記憶するという営みによって、今も続く戦争や暴力、
世界の不条理を止めることはできないのだろうか。
何を、何のために、私たちは記憶するのか。

本書を手にして、「記憶をめぐる思考の旅」へ出かけてみませんか。
過去をみつめることで、一人ひとりを大切にする共生の社会へと向かうために。
そして、対話を続けるために。

石岡史子、岡裕人『「ホロコーストの記憶」を歩く
一過去をみつめ未来へ向かう旅ガイド』
子どもの未来社、2026、P4-5

禁転載